

4 果 樹

項 目	作 業 内 容
<p>(1)かんきつ類の優良系統・品種への更新</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○かんきつ類の優良系統・品種への更新 ○落葉果樹の凍霜害対策 ○病虫害防除 <p>1 か月予報では、気温は高い見込みである（3月21日高松地方気象台発表）。しかし、この時期は予期せぬ突風や低温に見舞われることもあるため、気象情報をこまめに確認する。</p> <p>老木や経済性の悪い園地等では、新品種や優良系統へ更新する。適地適作を重視し、冬季に積雪や低温による被害の発生が懸念される園地は、収穫時期の遅い中晩柑類への更新は控え、品種特性が十分発揮できるよう心がける。</p> <p>更新の方法には改植と高接ぎがあるが、苗木による改植は3月中～下旬、高接ぎは4月が適期である。穂木、苗木は種苗法に則して流通されたものであるかどうかを十分確認する。</p> <p>ア 改植</p> <p>改植は発芽前に行い、列植えにするなど、マルチ栽培や作業性を考慮した植栽とする。粗雑な植付けは後の生育が悪くなるため丁寧に行う。活着が悪くなるため根の乾燥には注意し、1年生苗木の場合、主幹の長さを約40 cmに切り、もし傷んだ根があれば切除し、細根を多く残す。接ぎ木部分が土に埋もれると、</p> <div data-bbox="970 1144 1390 1597" data-label="Image"> </div> <p>写真1 苗木の植え付け</p> <p>自根の発生や生育不良の原因となるため、深植えにならないようにする。</p> <p>定植後は支柱を立て固定することで、風による倒伏を防止する。また、土壌を乾燥させないように定期的にかん水を行う。生育期間を通じて十分かん水することが樹体生育促進のための重要なポイントであり、敷きわらや抑草シート等により土壌乾燥防止に努める（写真1）。</p> <p>さらに、生育促進のため、発芽後には窒素主体の液肥を葉面散布する。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 落葉果樹の凍霜害対策</p>	<p>イ 高接更新</p> <p>高接ぎは台木が発芽した頃に行うと活着率が優れる。ただし、接木後に降雨が多かったり、低温にあったりすると活着率が低くなり、接木後の初期生育も劣る傾向にあるため接木作業は丁寧に行う。穂木には、品種・系統が確実で、ウイルス等に侵されていない樹から採穂したものを使い、なかでも充実した春枝や夏枝を利用する。また、中間台木にウイルスが保毒されていると、罹病性品種では激しい症状を呈することがあるので接木後の樹の状態も確認する。</p> <p>ウ 接木の方法</p> <p>よく研いだ接木ナイフを用い、台木、穂木の切り口を平らでまっすぐに、形成層がきれいに出るように切り込む。台木と穂木の形成層が密着するように合わせ、穂木が動かないよう接木テープでしっかりと固定する。穂木部は乾燥防止と雨水の侵入がないようにパラフィンテープで被覆する。</p> <p>写真2 切り接ぎによる更新</p> <p>中間台は樹勢低下を避けるため、すそ枝を力枝として残す。枯れ込みを防ぐため、切り口はアルミホイルで覆い癒合を促進させる(写真2)。台木および中間台木部は、直射日光により日焼けが発生し樹勢低下を招くことがないよう、日焼け防止剤等を塗布する。</p> <p>発芽後は、窒素主体の液肥の散布と病虫害防除を徹底し、新梢の生育促進を図る。また、台風などによる枝折れを防ぐため、支柱の設置や誘引をしておく。</p>
	<p>落葉果樹では、温暖化によって発芽期が早まる傾向がみられるため、発芽から開花期・幼果期にかけては凍霜害の恐れがある。</p> <p>凍霜害は、移動性高気圧に覆われ放射冷却の起こる無風の夜間から早朝にかけて発生しやすいため、週間天気予報や霜注意報をこまめに確認する。被害は、樹種や生育ステージにより異なり、生育が始まるとともに耐寒性は急激に低下する。一般的には開花から幼果期にかけて-2℃に30分以上遭遇すると、新生器官に障害が発生する危険性が高くなる。</p>



写真2 切り接ぎによる更新

項 目	作 業 内 容
(3) 病虫害防除	<p>凍霜害に対する確実な対策は今のところ無いが、先月の天候と農作業を参考にし、防風林を配置している園地では手入れを行い、園地内の風通しを良くして、冷気が留まらないようにする工夫が重要である。</p> <p>ア かんきつ類 そうか病 温州みかんでは旧葉にある病斑が伝染源となり、降雨後に湿った状態が続く園地では発生が多い傾向にある。防除は、新梢が1 cm 程度となる時期が最も有効であり、病原菌が感染した後では、その効果が極めて低下するので適期を逃さないようにする。</p> <p>イ 落葉果樹 キウイフルーツかいよう病 本病への予防や被害の拡大を防ぐため、銅剤による薬剤散布の徹底に加え、定期的に園地の巡回を行い、万が一の発病に備え早期発見に努める。特に、発芽期から新梢伸長期にかけては感染リスクが高いため重点的にモニタリングを行い、葉や花蕾の褐変、枝幹等からの樹液の流出、新梢の枯死といった症状が確認された場合には発症部位を切除し、園外で適切に処分する。</p> <p>ウ 共通 アブラムシ類 かんきつ類では、アブラムシが多く寄生すると新梢や新葉が奇形となって生育が阻害され、葉や果実が黒くなる原因ともなる。落葉果樹では、もも、うめなどで葉が巻き込む被害が発生する。被害の拡大や増殖を避けるため、発生が見られたら早めの防除を徹底する。</p>

(作成：果樹研究センター)